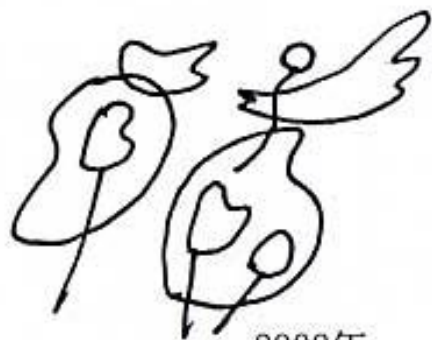


空



2008年

SORA 23号

晴夜 (23) | 2

柴田 佐知子

浮人形どこへも行けず浮き上がる

毒盛つて恭しくも夏料理

海神の茅の輪荒々仕上がりぬ

おほかたの島人くぐる茅の輪かな

父が書く形代の字の震へをり

頭からまつすぐに蛸泳ぎだす

噴水のはじめは天が引き上ぐる

放ちたる螢机の闇へ入る

初夏の魚に塩打つ裏表

彼の夜

荒井千佐代

ゴーギャンは輪郭を濃く南風

書齋にて過ごす一と日や登四郎忌

朴散るや心の罅も八方に

夏満月生まれしばかりの嬰に会ひに

心中も真暗闇なり螢狩

ぞんぶんに闇をまとひて初螢



先日、「沖」蒼茫集同人の安居正浩氏が来崎した。折良く長崎港まつりの日だったので、会員の数名と一緒に、港内から打ち上げる花火見物しようという

螢火つめたし螢の闇ぬくし

五つ目の堰よりは黄泉ほたる谿

母逝きし彼の夜も螢けふも螢

ちちははに逢はむ螢を追うてゆく

ドヴォルザーク聴き父の日の夫なりし

生と死のあはひに姉や梅雨長し

梨を剥く水の地球を想ひつつ

ののしり合ふや蚊柱を真ん中に

現世や苺つぶせばもも色に

事になった。それも夜景と花火の二物を同時に堪能できる稲佐山がいいというところで、車二台を走らせた。

見下ろす花火、街や家々の明かりを背景にした花火は長崎に住む私も初見。十数年振りの稲佐山からの夜景（昔は百万ドル、現在は？）も。「こんなに綺麗だったのか」と再認識した。

翌日は「花火は夜空に開くもの、見上げるもの、近くから見ると、という家族に同行し、打ち上げ場の港の方へ向かった。駐車場が満車で、私だけは路上の車の傍から、復元出島の屋根の上に開く花火を見た。それも風情があり、満更でもなかった。ところが岸壁から見た夫は「煙が動かず、半分位しか見えなかった」と。

来年は家族を説得し、冷房の効いた稲佐山展望台の椅子に座しての花火見物としたいものだ。が、そう簡単に考えを変える家族ではないから、多分無理。

劬斗雲

服部 早苗

春耕の畝一本の紐置かる

種蒔くやとくとくとく水の神の脈

青蔦の風くる図書の返却日

枇杷の種角なき人のごと丸し

白鷺と吾と先に動いた方が負け

乙姫にもらひたるやう螢籠



三歳の孫は、四月から幼稚園に通いはじめた。初めての集団生活は子供を急速に成長させるようだ。それまでしていた

望洋の首のほそさよ羽抜鶏

蜘蛛の囀を通りし風のなめらかに

たとふれば曲り胡瓜の心地して

觔斗雲のごとき一片梅雨の明け

祭神輿大樹の下に据ゑらるる

月涼し大王松の居丈高

夏つばめ山河傷つくばかりにて

忘草一生百年とは長し

棕櫚の木のもう凌霄花となるほかなく

おむつもとれて、ひとりでトイレに行けるようになった。単語と単語がつながり、話ができるようになった。遊びに来ると私の机の上で鉄を使つて紙を切つたり、スティックのりを使つて紙を貼つたり、きつと幼稚園でそういうことをしているのだろう。彼が帰つた後は、机の上がベトベトしていて閉口するのだが、ほほえましくもある。

入園二日目の幼稚園帰りに遊びに来た時のこと。見ると着ているスモックのお腹のあたりが水に濡れている。早くも水遊び？母親に聞くと、そうではなく、幼稚園で母親と別れるのがいやで大泣きました。涙が出た時はこれで拭くんだよとポケットの中に入れておいた小さなハンカチ、そのハンカチが濡れていて外にしみ出してしまったのだとか。

幼稚園で母親と別れたあと、しゃくりあげながらそれを使つて拭いている姿を想像したら、なんだかとてもいじらしくなつてしまつた。今は幼稚園生活も元気に楽しく。一学期ももうすぐ終る。

みあれ祭 苑 実 耶

雨の中戻りしごとき汗の子よ
蝉の屍の傍らに蝉発ちし穴
夕端居二人の息のただありて
子の呉れし甚平に替へ子を迎ふ
立秋の空の青さを厭ひけり
堤防に人の溢るるみあれ祭
みあれ祭媛神乗する新造船
船団が波高くせりみあれ祭
菊日和鯉の集まる太鼓橋
巻寿司の端に手を出す運動会



今年の五月十六日は、五代目柳家小さんの七回忌だった。小さんが亡くなった時、記者が孫の柳家花緑に「聞いておきたかったこと、教えてほしかったことなどありませんか？」と質問すると、「ありません！全部教えてもらいました」と、間髪を容れずに答えた。

余りにもきつぱりとした言葉に驚いたが、私もそうありたいと思った。そう思っているいろいろな話をしながらも、その時は母との時間はたくさんあると思っていたが、今年母の初盆を迎える。

夏の月

高倉恵美子

病院の玄関にある燕の巢

六月や体ちかちかしてきたり

ややこしき話は延ばし夏の月

子供らの田植足跡ばかりなり

緑蔭に夫を待つ間の指遊び

茄子の花意見通らぬ世となれり

青葉木菟老いて留守居の昼餉かな

太り過ぎた玉葱ばかり吊るしけり

人の名のすぐに出てこぬ茗荷汁

探り掘る初馬鈴薯の太きこと

・ 諸九尼・

五月に従姉妹に会った折、二冊の本を渡された。「江戸の女俳諧師『奥の細道』を行く諸九尼の生涯」(金森敦子著)と『秋風の記』をゆく」(平島愛子著)である。従姉妹が親しくしている方から俳句をしている人に読んで貰えると嬉しいと言われて預かってきたという。その方は諸九尼の生家である久留米市田主丸町唐島の永松家の奥様であるという。

私も諸九尼のことは少しは知っていたが詳しく書かれた本を読むのは初めてである。今、田主丸町では郷土が生んだ俳人を顕彰しており、生家の前に生誕の碑、文化施設・そよかぜホールには句碑「いつとなくほつれし笠やあきの風」が立つ。生地に初めての句碑である。



花火 樋口みのぶ

正確に春の来てゐる機の水
 雀の子遠の朝廷の端にをり
 岬まで駆ける銀輪五月来る
 青梅雨や内より暮るる天守閣
 夏芙蓉や聞かずじまひの母の恋
 烏賊干して網を繕ふ網の陰
 夏の航陸の灯星と光り合ふ
 大輪の花火抜けたる航空機
 ひたひたと潮の満ち来て花火果つ
 汗の手を交して駅に別れけり
 玄関の真中に揃へ盆の下駄

新聞に読者の投稿から成る「紅皿」というコラムがある。そこに二十五年間投稿されてきたおばあちゃんが、九十八才で逝かれたと顔写真入りで載っていた。日々を感謝、人に、自然に感謝と明るい文面で綴られていつも温かな気分させられていた。以下抜粋。「三年前に次々と両足を骨折しました。でも生きております。多くの方に助けられながら。人間は一人では生きられません。まわりの愛情に涙がにじみます。ありがとうございます。」

又、ある時は「じいちゃん、ばあちゃん、ホーイホーイ。元気出しなよ。ホーイホーイ。」という軽妙な言葉で書かれた親子の唄というのがあり感動した。読者が曲をつけられたとの事。初めて拝見したお顔も文面通りの笑顔溢れた方であった。楽しい文が今後読まれなくなるのは寂しいが、心よりご冥福を祈りたい。私もこういうおばあちゃんを目指して。